令和8（２０２６）年度11月「歳時記」

霜月――冬の足音、温もりに満ちる山里

霜月、11月。山々の紅葉は最後の輝きを放ち、やがて風に舞う落ち葉とともに、山里はゆっくりと冬の装いへと移り変わっていきます。「筒賀の大銀杏」の冬支度は、まさにその象徴です。

３日は「文化の日」です。今月はまさに「文化」の月。町内の保育所・認定こども園や小学校では文化的な発表会が催されます。子どもたちは歌や合奏、劇や踊りなど、日頃の遊びや学びの成果を舞台いっぱいに表現します。会場には、温かな拍手や笑顔が広がり、子どもたちの一生懸命な姿が地域に感動と元気を届けてくれることでしょう。月末には、「安芸太田町文化・芸能フェスティバル」に多くの町民が集います。今年もレベルの高い祭典になることでしょう。

７日頃には「立冬」を迎えます。暦の上では冬の始まりとなり、朝夕の冷え込みはいっそう厳しさを増します。早朝には山間に薄霧が立ち込め、凛とした静寂の中に冬の気配が感じられるようになります。

そして、各地域で秋の収穫に感謝する神社の祭りが催されます。新米の香りが漂う境内や集会所では、「神楽」が舞われ、身を寄せ合う住民の笑顔と温かな話し声が寒さを和らげます。また、14日・15日の「加計 五サー市」と秋の「吉水園」一般公開で、町が大いに賑わいます。

22日頃には「小雪」を迎えます。山頂付近では初雪の便りが届く頃となり、冬がいよいよ現実味を帯びてきます。日差しは優しく傾き、日暮れも一段と早くなります。

23日は「勤労感謝の日」です。実りの秋を無事に終えた農家では、来春に向けた土作りや農機具の手入れ、干し柿づくりや漬物仕込みなど、冬の手仕事が本格化します。地域を支える人々の営みと知恵が、静かな山里に脈々と受け継がれていきます。

11月は、深秋から初冬へと移ろう静謐で豊かな季節です。澄み渡る夜空には星々がきらめき、寒さが増すほどに人と人との温もりや暮らしのありがたみが心に沁みわたります。

静かに冬を迎える安芸太田町。山々に抱かれた冬支度の風景の中に、地域の絆と温かな営みが息づくこの季節は、私たちに落ち着きと深い安らぎを与えてくれます。

＜古文＞

この帝、いまだ位につかせたまはざりける時、十一月二十余日のほどに、賀茂の御社

の辺に、鷹つかひ、遊びありきけるに、賀茂の明神託宣したまひけるやう、「この辺にはべる翁どもなり。春は祭多くはべり。冬のいみじくつれづれなるに、祭たまはらむ」と申したまへば、その時に賀茂の明神の仰せらるるとおぼえさせたまひて、「おのれは力およびさぶらはず。おほやけに申させたまふべきことにこそさぶらふなれ」と申させたまへば、「力およばせたまひぬべきなればこそ申せ。いたく軽々なるふるまひなさせたまひそ。さ申すやうありとて。近くなりはべり」とて、かい消つやうにうせたまひぬ。

いかなることにかと心得ず思し召すほどに、かく位につかせたまへりければ、臨時の祭せさせたまへるぞかし。賀茂の明神の託宣して、「祭せさせたまへ」と申させたまふ日、酉の日にしてはべりければ、やがて霜月の果ての酉の日、臨時の祭ははべるぞかし。

＜口語（現代語）訳＞

この帝（宇多天皇）が、まだ即位なさっていなかったころ、十一月二十日過ぎごろに、賀茂神社のほとりで、鷹狩りをして遊び歩いていらっしゃったところ、賀茂明神がお告げになったことには、「このあたりにおります老人です。春には祭が多くございます。冬はたいそう退屈なので、祭を行っていただきたい」と申し上げなさった。そこで、そのとき、賀茂明神がおっしゃることだとお思いになって、「私にはそのような力はございません。天皇にお申し上げになるべきことでございます」と申し上げなさると、明神は、「あなたには十分にお力がおありになるはずだからこそ申し上げるのだ。あまり軽々しい振る舞いをなさってはいけません。そのように申し上げる理由があるのです。近々実現されることでございます」とおっしゃって、かき消すようにお姿が見えなくなってしまった。

帝は、どういうことなのだろうかと理解できずにお思いになっていたところ、このように即位なさったので、臨時の祭を催しになったのである。賀茂明神がお告げになって、「祭をお催しください」と申し上げなさった日が酉の日でございましたので、そのまま十一月の最後の酉の日に、臨時の祭が行われるのである。

十一月のお祭りにちなんだ作品です。帝がまだ即位前に加茂神社の近くで狩りをしていた際、賀茂明神から臨時の祭を行うよう神託を受けました。帝はその意味を理解できませんでしたが、後に即位して神託が現実となったため、そのお告げに従って臨時の祭を行いました。神の加護と予言の的中を語る説話です。出典は「大鏡」、藤原道長を中心とする藤原氏の栄華と宮廷社会の変遷を、老人たちの回想と語りによって描いた平安後期の歴史物語です。

それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

＜練習問題＞

問1　「つれづれなる」の意味として、最も適切なものを次のア～エから一つ選びましょう。

ア　忙しくて落ち着かない　　イ　退屈で手持ちぶさたである

ウ　悲しくて涙が出る　　エ　楽しくて仕方がない

問2　賀茂の明神から祭りを行うように求められた人物は、初め、どのように返事をしましたか。古文中から抜き出して答えましょう。

問3　「かい消つやうにうせたまひぬ」とありますが、賀茂の明神はどのように姿を消したのですか。最も適切なものを次のア～エから一つ選びましょう。

ア　歩いてゆっくりと立ち去った。　　イ　人々に見送られながら帰っていった。

ウ　まるでかき消されたかのように、突然姿を消した。

エ　人々に別れを告げて、遠くへ旅立った。

問4　この帝が即位した後、臨時の祭りが行われることになったのはなぜですか。本文の内容を踏まえて、説明しましょう。

＜解答例＞

問1　イ

問2　「おのれは力およびさぶらはず。おほやけに申させたまふべきことにこそさぶらふなれ」

問3　ウ

問4　帝が即位する前に賀茂の明神から祭りを行うようにとの託宣があり、即位した後、その託宣に従って臨時の祭りを行ったから。

安芸太田町教育委員会　教育長　大野　正人